巻頭特集 創業120年以上を数えるまちの提灯店・に志たに

手作り提灯に込める丹誠

我がまち久喜市で121年にわたり、
提灯を手作りし続けるに志たに。
時代が移り変わっても挫けぬ職人の矜持と、
提灯作りへの思いについて、
4代目・西谷友孝さんと、5代目・公伸さんに話を聞いた。

時代の変遷を経てなお受け継いだ提灯作り

すっすっ、さっさっさっ、ばさりばさり。

久喜市六万部、のどかな田園地帯にある作業場から、提灯作りの音が聞こえてくる。

手際良く筆を動かすのは、創業以来、提灯を手作りし続けている有限会社に志たに(にしたに)の4代目・西谷友孝さんと、5代目・公伸さん。「ちょうど、久喜提燈祭りのための製作が佳境です」と、友孝さんは笑顔で話す。

に志たにが、現在の久喜市南1丁目に店を構え、提灯作りを始めたのは121年前。「資料で確認できるのは明治30年ですが、もっと前から作っていたと思います」と、友孝さん。

初代が提灯作りを始めた経緯は定かでない。しかし、携帯式石油ランプの普及する以前、夜間に外出する際の光源として、提灯はまだまだ市民にとって不可欠な日用品。に志たには、提灯の製造・販売を通して地域に根付いてきた。

やがて、時代と共に石油ランプが一般家庭にも普及し、提灯の需要は減少。さらに戦後、ほとんどの家庭に電気が引かれるようになると、日用品としての提灯は役目を終えていく。

「当社では戦前・戦後、提灯だけではやっていけないと、看板業を始めました。でも、提灯作りは決してやめませんでした」

現在、同社が作る提灯は年に300個程度。祭り用やお盆提灯、贈答用や嗜好品が主で、数は多くない。あくまで看板が事業の柱。それでも、先祖が始めた提灯作りは、今に至るまで、連綿と受け継いできた。その理由を聞くと、「日本の伝統文化だから。絶やすわけにはいかないよね」と、友孝さんは笑う。

手仕事ならではの仕上がりが誇り

一張りの提灯を作る工程はとても細かい。それぞれの段階で熟練の職人技を求められるが、同社で行っているのは絵付け。骨組みに和紙を貼った無地の火袋へ、文字や家紋を描き、色を塗る作業だ。

骨組みに和紙を貼った無地の火袋に、細い面相筆で文字の輪郭を描く。輪郭を描いた後は中を塗っていく

フリモARで提灯作りが見られます！

「難しいのは文字ですね。習字のようにひと筆で書くのではなく、輪郭を細い筆で描いて、その中を塗ります。バランスがとても重要なんです」と教えてくれたのは公伸さん。

家業に入って20年以上。当初は友孝さんに内緒で勝手に文字を描き、商品をダメにしてしまった苦い経験もある。それでも、3代目の文字に近づきたいと定規で長さや太さを測り、模写をしながら研鑽を積み、技術をものにしてきた。

「文字には描き手の個性が強く出ます。4代目でなく、お前の文字が良いんだといって注文を受けた時は、本当に嬉しかったですね」と笑う。

提灯の文字描きは、一人前になるまでに5年、10年かかると言われる。現代ではパソコンで書体を選び、寸分違わない文字を入れる方法もあるが、「手描きの味は別格です。特に、祭りに使う提灯には威勢の良さが必要。文字が跳ねる部分のかすれ具合なんかは、手描きならではの表現ですね」と、友孝さんも職人の手仕事に胸を張る。

久喜提燈祭りに寄せる職人の思い

久喜市の夏の風物詩は、言わずと知れた八雲神社の祭礼行事、久喜提燈祭り。江戸時代、浅間山の噴火で夏作物が全滅。そこで祭礼用の山車を曳き回し、豊作祈願したのが始まりと伝えられ、230年以上の歴史を誇る。

例年7月12日と18日に行われるこの祭りの魅力は、7町内から繰り出される7台の山車。日中は山車に人形を取り付けるが、夜になると外され、4面に提灯を飾り付ける。その幻想的な趣は、関東一円に広く知られるほどだ。

に志たにでは明治の頃から、この山車に飾られる提灯を作り続けている。「地元の志ん二(しんに)はもちろん、今までに各町内の提灯を作ってきました」と、友孝さん。職人として、地域の伝統的な祭りに自分の作った提灯を飾れるのは、嬉しいものだと話す。

祭り初日の大雨で提灯がダメになってしまい、徹夜作業で数百個を仕上げた経験もある。それでも、「この祭りに提灯は不可欠。まちの人々のためにも、私たちは一生懸命に作るだけ。それが誇りです」と、公伸さんは言葉を結んだ。

日本の伝統文化を絶やさぬよう、地元の祭りを彩るよう、に志たにの職人は今日も筆を手に提灯を仕上げる。その営みは、今後も我がまちに息づいていく。

戦後間もない頃、に志たにの店先で撮られた、志ん二の山車の写真。もちろん提灯は同社のものだ

有限会社に志たに 5代目 西谷公伸さん

現在42歳。夢を見つけられなかった10代に稼業へ入り修業を重ねる。子どもの頃、祭りで自社の提灯を見ると嬉しかったと笑う

有限会社に志たに 4代目 西谷友孝さん

現在68歳。稼業に入って50年の大ベテラン。平成24年には埼玉県内で2人目となる全国技能士会連合会のマイスター表彰を受賞

左)同社で作るお盆提灯。家紋は描くのがとても難しいと友孝さんは話す　右)3代目が製作した店舗に飾るための提灯。縁取りをした江戸文字が美しい

1 現在、に志たにの職人は友孝さんと公伸さんの2人。祭りの提灯づくりは分業で行う　2 文字を描き、色を塗った提灯は、油を塗って防水性を持たせる　3 久喜提燈祭りでは、提灯に本物のろうそくを灯す。その柔らかな光が魅力だ

有限会社 に志たに
久喜市南1丁目9番29号
☎0480-21-0224

久喜提燈祭り「天王様」
【日程】7月12日(木)、18日(水)
【時間】12:20～22:00　【場所】久喜駅西口駅前周辺

フリモARアプリをダウンロード
App Store からダウンロード　Google Play で手に入れよう　で『フリモAR』を検索
※AppleおよびAppleロゴは米国その他で登録されたApple Inc.の商標です。App Store®はApp Inc.のサービスマークです
※Google Play および Google Play ロゴは Google Inc.の商標です

文／生形勝喜　写真／Studio F COLLAGE　写真提供／に志たに　デザイン／神尾方子